

平成23年7月の解説（週間天気予報）

【7月の天候状況】

月のはじめは梅雨前線の影響により北・東・西日本では曇りや雨の日が多く、北日本では南からの暖かい気流の影響で気温が平年を大きく上回りました。上旬後半から月半ばにかけては太平洋高気圧が日本付近で強まり、上空の偏西風も北に蛇行し暖かい空気に覆われやすくなったことから、東日本を中心に所々で猛暑日となりました。なお、四国、中国、近畿、東海地方では8日ごろ、九州北部、関東甲信、北陸地方では9日ごろ、東北南部、東北北部では11日ごろ、梅雨明けしました（いずれも速報値）。

中旬後半には日本付近での太平洋高気圧の勢力は弱まり、18日には台風第6号が四国の南を北上、20日には徳島県南部に上陸した後、潮岬付近を通過、その後本州の南海上を南東進しました。東・西日本の太平洋側を中心に大雨となり、四国や紀伊半島などの所々では総降水量が1,000ミリ前後となる記録的な大雨となりました。

下旬は、上空の寒気や湿った気流の影響により、北海道を除いて雲が広がりやすく、所々にわか雨や雷雨となりました。27～30日にかけては、新潟県と福島県会津を中心に大雨となり、4日間の総降水量が7月の平年の月降水量の2倍以上に相当する記録的な大雨となり甚大な災害が発生しました（「平成23年7月新潟・福島豪雨」）。

月平均気温は北日本から西日本にかけて高く、北・東日本では平年を1℃以上上回りました。沖縄・奄美では平年並となりました。月降水量は北日本の太平洋側、西日本の日本海側、沖縄・奄美で少なく、北日本の日本海側、東日本では平年並、西日本の太平洋側では多くなりました。月間日照時間は北・東日本の太平洋側、西日本の日本海側で多く、北・東日本の日本海側、西日本の太平洋側では平年並、沖縄・奄美では少くなりました。

【7月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7日目の平均）は、全国平均では例年値^(注)より5ポイント高い70%でした。地方毎の適中率では北海道地方と九州北部地方で11～13ポイント高くなりましたが、沖縄地方では8ポイント低くなりました。

最高気温（2～7日目の平均）の予報誤差は、例年値程度の地方が多く、九州南部地方では例年値より0.6℃小さくなり、全国平均では0.1℃小さい2.5℃になりました。最低気温（2～7日目の平均）の予報誤差は、ほぼ全国的に例年値より小さく、全国平均では0.1℃小さい1.6℃になりました。

^(注) 例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【9月の週間天気予報の利用にあたって】

太平洋高気圧に覆われる日が多い8月に比べて、9月は低気圧や前線が日本付近を通過しやすくなります。低気圧が発達しながら通過した後は北からの冷たい空気が流れ込むため、晴れても日中の気温は8月ほどには上がりにくく、夏から秋の気温に急激に変化します。

また、晴れた夜は放射冷却現象の効果が強まって、内陸部を中心に翌朝の最低気温が下がりやすくなります。このため、日中と夜の気温の差が大きくなります。週間天気予報では、1日毎の天気予報とともに最高気温と最低気温の予報も行っていますので、毎日の温度変化とともに1日の温度差も参照し体調管理などに注意して下さい。